

## 令和7年度千葉氏公開市民講座

### 「軍記物語と黄表紙にみる下総の源平合戦」講演録

千葉市立郷土博物館

日時：令和7年6月14日（土）13：30～16：00

会場：蘇我コミュニティセンターハーモニープラザ分室 3階ハーモニーホール

講師：千葉市立郷土博物館 研究員 白井千万子、岩橋直樹

司会 皆さま、こんにちは。ただ今より、令和7年度千葉氏公開市民講座「軍記物語と黄表紙にみる下総の源平合戦」を開講いたします。初めに、当館館長の芦田よりごあいさつ申し上げます。

芦田 皆さま、こんにちは。郷土博物館の芦田と申します。よろしくお願いいたします。本日は「千葉氏公開市民講座」にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

さて、郷土博物館は現在、展示リニューアルのために休館をしておりますけれども、今年の11月ごろのリニューアルオープンを予定しており、それに向けて現在作業を進めております。リニューアル後につきましては、これまでできていなかった、千葉市の原始古代から近現代に至る、通史の展示が実現する予定になっています。どうかご期待いただきたいと思います。

さて「千葉開府の日」であります6月1日にちなみ、この時期に毎年講座を開催しております。千葉市は4つの地域資源というものを定めており、そのうちの1つに千葉氏がございますが、その理解を深めていただくことを目的として本講座を開催しております。毎回さまざまな側面から、この千葉氏について取り上げさせていただいております。ご参加いただいた方からも大変好評をいただいているところでございます。

突然ではございますけれども、皆さま、現在放送されているNHK大河ドラマの「べらぼう」をご覧になっていらっしゃいますでしょうか。これまでさまざまな歴史上の人物を主人公として取り上げてきた大河ドラマですけれども、今回は蔦屋重三郎（つたやじゅうざぶろう）という、「江戸のメディア王」と呼ばれた人物を主人公として、江戸の出版文化を取り上げています。どちらかといえば、それほどメジャーな人物ではないかというように思いますが、江戸の出版文化を正面から取り上げているということで、これまでになかった新鮮な切り口ではないかなと思っております。

それにあやかっただということではないのですけれども、千葉氏に関係する、これまであまり知られていなかった一面といたしまして、今回の講座では、千葉氏の話が江戸の出版物にも登場していたということを知っていただきたく、このテーマとさせていただきます。

詳しくは、後ほど趣旨説明がございまして、千葉一族の歴史の中で重要な局面であ

った結城浜（ゆうきはま）の合戦の顛末は『源平闘諍録（げんぺいとうじょうろく）』や『千学集抜粹（せんがくしゅうばっすい）』、また『千葉妙見大縁起絵巻（ちばみょうけんたいえんぎえまき）』とか、そういった資料に記されているということをご存知の方も多くいらっしゃるかと思います。江戸時代になってこれを元ネタにしパロディー化した本が出版されます。黄表紙の『月星千葉功（つきとほしちばのいさおし）』というのがそのタイトルなのですけれども、本日はこの黄表紙に焦点を当てつつ、当館の二人の研究者によって、中世の『源平闘諍録』と読み比べながら、江戸時代に千葉氏の物語の何が求められて、どのように人々に受け入れられていったのかということ、一緒に見ていきたいなと思っております。

後ほど改めて趣旨の説明と講師の紹介がございますが、お配りしております質問票を通じて、皆さまのご質問にお答えする時間も設けてございます。本日の講座にご参加くださった皆さまにとって、有意義な学びの時間となることを祈念いたしまして、簡単ではございますけれども、開会のあいさつとさせていただきます。今日はよろしく願いいたします。

司会 続きまして、本日の講座の趣旨について、総括主任研究員の外山よりご説明申し上げます。

### 趣旨説明

外山 郷土博物館の外山です。今日はよろしく願いいたします。ただ今の芦田館長の挨拶とも重なりますが、本講座の趣旨についてご説明いたします。今年の大河ドラマ「べらぼう～蔦重栄華乃夢噺～」をご覧になっている方も多いかと思いますが、「江戸のメディア王」、「蔦重」こと蔦屋重三郎を主人公とした物語です。これをきっかけに江戸時代、近世の出版文化への関心が高まっています。

現在、地元の千葉市美術館でも企画展「江戸の名プロデューサー蔦屋重三郎と浮世絵のキセキ」を開催中です。お手元にリーフレットをお配りしてあります。既にご覧になった方もいらっしゃるでしょうが、まだの方はぜひお運びいただければと思います。

さて、この千葉の町の礎を築いた中世の武士団千葉氏と江戸時代の庶民が楽しんだ小説とは、全く無関係に思われがちですけれども、江戸時代後期の安永6年（1777）に出版された『月星千葉功』という本は、千葉氏と妙見を題材とした、黄表紙というジャンルの小説です。『金々先生栄花夢（きんきんせんせいえいがのゆめ）』で知られる恋川春町（こいかわはるまち）、大河ドラマでは岡山天音さんが演じていますけれども、その春町が絵を描き、そして鈴木吉路が文章を担当し、これまた大河ドラマでは片岡愛之助さんの演じる鱗形屋孫兵衛が出版元となって刊行された本です。この『月星千葉功』には文中に「べらぼう」という言葉も出てきます。最初にお話する、白井研究員のレジュメの10ページにありますので、ぜひ後でゆっくり「べらぼう」という言葉を探してみてください。

ところで東京湾に面した、今はすっかり埋め立てられてしまいましたけれども、千葉市中央区の寒川、神明町、新宿町付近は、かつて「結城」と呼ばれていました。残念ながら、この結城という地名は、今ではもう消滅してしまっておりますけれども、もしかしたらある程度年配の方にはJR本千葉駅の南口、海側を出たすぐ近くに結城幼稚園があったことをご記

憶の方もいらっしゃるかもしれません。

この付近で治承4年(1180)に「結城浜合戦」という戦いが行われます。これは房総に逃れた源頼朝の下にはせ参じた千葉氏が、平家方の有力者で平清盛と縁戚であった千田親正、親雅とも書きますが、この親正を倒した戦いです。頼朝方が初めて平家方の一角を崩したという戦いで、もしここで勝たなければ鎌倉幕府もできなかったでしょうし、「鎌倉殿」もいなかったという重要な戦いでありまして、いわば時代を動かした合戦として評価されています。また、伝説では千葉氏の守護神とされる妙見が現れ、劣勢であった千葉氏を助けてくれたとされ、妙見説話でも知られています。

この合戦については、「千葉氏版の平家物語」と言われ、鎌倉時代の終わりにできた『源平闘諍録』という軍記物語や、皆さんご存じの『千学集抜粹』、あるいは『千葉妙見大縁起絵巻』といった中世の資料に詳しく記されています。『月星千葉功』はこれらを下敷きにして絵と文を取り合わせ、千葉氏と千田親正との争いを滑稽に描いたパロディー作品です。頼朝が行徳(市川市)の名物だった笹屋うどんを賞味したとあります。この時代にはまだうどんはなかったのですけれども。親正と千葉胤政、これは常胤の嫡男ですが、この二人の恋のさや当て、そして千葉氏が妙見信仰によって武運を開いたことなどを面白おかしく描いています。そして、お茶の水などの千葉の名所や旧跡も登場します。最後は「詳しくは下総国妙見寺」、現在の千葉神社ですが、その「縁起をご覧あるべし」と結ばれます。

今回の講座では『源平闘諍録』とそのパロディー『月星千葉功』を、それぞれの分野を専門とする当館の二人の研究員が紹介し、これらを読み合わせることを通して、中世の千葉氏の物語が近世、江戸時代にも広く人々に受け入れられたことを明らかにしたいと思っています。流行作家によって小説となったり、笹屋屏風に描かれたりしたことを通して、戦国末の天正18年(1590)に千葉氏は滅亡してしまいましたが、その後も千葉氏は決して忘れられた存在ではなく、江戸時代の人々の心に妙見信仰とともに脈々と生き続け、そして来年に控えた「千葉開府900年」を前に、現在に至っているということを知っていただければ幸いです。

それでは今日一日、どうぞよろしく願いいたします。

## 講演 1 黄表紙『月星千葉功』

司会 それでは講演に移ります。第 1 部の講師、白井千世子さんを紹介いたします。

白井さんは千葉市内の中学校で社会科の教員として教鞭を執り、現在は千葉市立郷土博物館の研究員として、調査、研究、講座等の普及活動に当たっております。専門は近世史・民俗で、特に近世や近代の民衆が集まって寺社に参詣する「講」や、巡礼に関心を持って研究を進めています。第 1 部では、黄表紙『月星千葉功』について講演します。それではよろしくお願いたします。

白井 郷土博物館の白井と申します。よろしくお願いたします。本日は「軍記物語と黄表紙にみる下総の源平合戦」というタイトルの下で、私は江戸時代に刊行された黄表紙『月星千葉功』について見ていきます。月星と言いますと、千葉氏という連想をされる方が多いと思います。千葉氏が物語の中でどのように取り上げられているか、鎌倉時代の『源平闘諍録』と比較しながら見ていきます。

まず、黄表紙とは何かというのを確認してから『月星千葉功』を読みます。最後に 3 つのキーワードを設定しましたので、それに沿ってまとめてみます。『月星千葉功』の原文は、国立国会図書館のデジタルコレクションに収められておりますので、興味のある方はご覧ください。

今日の資料は『月星千葉功』の原文を翻刻して訳と注釈を付け、千葉市立郷土博物館の『研究紀要』29 号に資料紹介として載せたものです。それを元にして話を進めていきたいと思ひます。

### 1 黄表紙とは

「黄表紙とは何か」から入っていききたいと思います。黄表紙というのは、江戸時代に刊行された庶民向けの読み本です。赤本に始まり、黒本・青本と続き、黄表紙へと移行していきます。赤本は赤色表紙の子ども向け絵入り小本（しょうほん）で、挿絵とわずかな説明、会話で構成されています。題材は『桃太郎』『さるかに合戦』などのおとぎ話が中心になります。

18 世紀の初めに登場した赤本は、18 世紀半ばごろから黒本・青本へと移行します。黒本は黒色表紙の絵入り本で、成人までを対象としています。題材は豪傑譚（ごうけつたん）、化け物話、歌舞伎ものなどが中心になります。青本は青色表紙の絵入り本ですが、青というのは退色して薄黄色になるため、青本を黄表紙と称していました。題材は黒本とほぼ同一なので、黒本・青本と一括されました。

黄表紙というのは黄色表紙の絵入り読み物で、全盛は天明期です。現在、NHK の大河ドラマ「べらぼう」で田沼意次が登場していますが、田沼意次が老中を務めていた 18 世紀半ば以降に当たります。黄表紙は江戸土産として、地方では非常に喜ばれました。黄表紙には本屋の商標、刊行年の干支、画工や作者の名前が入り、出版物としての形が整っていきます。文や絵が緻密で、機知と穿（うが）ちに富んだ滑稽を描いています。洒落と風刺、流行語を

交えた当世風俗が江戸庶民の人気を集めます。

安永4年(1775)に『金々先生栄花夢』が出版され、これが草双紙の流れを変える画期的な作品となります。作者は恋川春町、版元が鱗形屋孫兵衛です。田沼意次の後に登場するのが松平定信ですが、松平定信は寛政の改革で出版文化を厳しく統制します。この頃出版された黄表紙として、朋誠堂喜三二の『文武二道万石通』、恋川春町の『鸚鵡返文武二道』などがあります。これらの作品は寛政の改革に想を得た作品で、絶版になります。

この頃には、松平定信の政治を皮肉った狂歌も流行します。「世の中に蚊ほどうるさきものはなし 文武というて夜も寝られず」。これは松平定信が文武、文武とうるさいので夜も寝られないという意味で、文武と蚊がぶんぶんと来てうるさいを掛けています。このように統制が厳しくなるので、黄表紙は持ち味のナンセンスな笑いを失っていきます。

さらに寛政3年(1791)には山東京伝が手鎖の刑になり、版元の蔦屋重三郎は財産の半分を没収されてしまいます。文化元年(1804)には喜多川歌麿も手鎖の刑になります。手鎖の刑というのは手に鎖をはめられてしまうので、文筆活動を生業とする者にとっては活動ができないということになります。

寛政の改革ではかなり厳しい統制が行われたので、松平定信と田沼意次を比べた狂歌「白河の清きに魚の住みかねて もとの濁りの田沼恋しき」も登場します。白河というのは、松平定信が奥州の白河藩主だったことと掛けており、おおらかだった田沼の時代が恋しいという思いがあります。黄表紙にとっては、冬の時代到来ということになります。

## 2 『月星千葉功』を紐解く

本題の『月星千葉功』を実際に紐解いていきたいと思います。まず安永6年に刊行された『月星千葉功』の概要ですが、全3巻10丁です。1丁は2ページですので、20ページからなります。撰者は鈴木吉路、画工恋川春町、版元鱗形屋孫兵衛で、恋川春町と鱗形屋孫兵衛の組み合わせになります。

ここで恋川春町と鱗形屋孫兵衛について触れておきます。恋川春町は浮世絵師で黄表紙、狂歌の作者です。本名は倉橋格(いたる)、父は紀州田辺藩士の桑島九蔵で、20歳の頃、駿河小島藩士倉橋忠蔵の養子になります。江戸留守居役として小石川春日町の藩邸に住み、恋川春町の号は居所にちなんだと言われます。身分は武士で、恋川春町はペンネームということになります。朋誠堂喜三二もペンネームで、恋川春町と同じように身分は武士です。

鱗形屋孫兵衛は絵草紙の大手版元で、出版物に三つ鱗の紋があることから、刊本は鱗形屋版と呼ばれます。17世紀中頃に江戸大伝馬町で開業し、黄表紙の版元として有名になりますが、安永9年(1780)には店を閉じてしまいます。鱗形屋が店を閉じると、その後を蔦屋重三郎が引き継ぐ形になります。

### (1) 『月星千葉功』の概要

物語の概要について簡単に触れておきます。1巻は妙見大菩薩の伝来と千葉氏の妙見信仰、寒川合戦に至る原因、2巻は千葉常胤に勘当される嫡子の胤政、勘当を許されて千田親正との合戦に備える胤政、3巻は寒川合戦の前哨戦と寒川合戦で示現する妙見大菩薩、そし

て最後に源頼朝の恩賞ということになります。

物語の登場人物は、歴史上の人物が源頼朝、北条時政、千葉常胤、千葉常胤の嫡子胤政、上総広常、千田親正、市川海老蔵です。市川海老蔵は江戸時代の人物ですが、それ以外は鎌倉時代の人物です。行徳のうどん屋笹屋仁兵衛、上総広常の娘末廣姫、末廣姫の腰元おさの、千葉胤政の草履取り折平、千田親正の家来轟軍蔵、千田親正の軍兵が物語上の人物として登場し、これらの人物がこの物語を面白おかしくしています。

## (2) 『月星千葉功』を読む

1巻の1から順を追って本文を見ていきます。1巻の1は妙見大菩薩が伝来し、千葉氏が守り本尊とする場面です。ここでは千葉氏の妙見信仰について、「千葉氏累代の守り本尊にして、その靈験挙げてかぞふるに暇あらず」と記し、その靈験を挙げればきりが無いとしています。

1巻の2は石橋山の合戦で敗れた源頼朝が房総に渡る途中、行徳の笹屋うどんに立ち寄る場面です。「中世の源頼朝と近世の笹屋うどんを結ぶ」というタイトルでキーワードを設けましたので、原文を読み少し説明を加えます。

「右兵衛の佐、頼朝公は石橋山の合戦に利なくして、土肥真鶴より安房の国へ渡らんと、わずか主従七騎にて小船にとり乗り出し渡りけるに、船中兵糧なく主従飢えに臨む。まず下総の行徳へ御船寄せければ、行徳のうどん屋、仁へえという者、早速うどんをこしらへ頼朝公をはじめ、奉公の連れの者へ勧めければ、頼朝公御かんななめならず、笹りんどうの御紋所をかたどり、家名を笹屋と呼ぶべしとのたまう」とあります。ここでは「笹りんどうの御紋所」と家名の「笹屋」が掛詞で、頼朝の家紋「笹りんどう」と「笹屋うどん」を掛けています。掛詞は黄表紙の中によく登場してきますが、うどんについても「これをあがりまして御運をどんどんとお開きなさりませ」と、「うどん」を食べて頼朝公が運を「どんどん」開くが掛詞になっています。

1巻の3は、千葉常胤が千葉の家に伝わる妙見尊の尊像を源頼朝に差し上げると、頼朝は常胤の嫡子胤政に「花かたみの茶入れ」と「雪の下の花生け」を与え、千田判官（はんがん、親正）がこれをねたむ場面です。スライドの真ん中辺りにあるのが妙見の尊像です。ここでも頼朝公が鎌倉より持ち来たりたまひし「雪の下という花生け」と鎌倉の地名「雪の下」が掛詞になっています。また、当時江戸で流行した言い回しとして、「金々」が登場します。「金々」というのは金ピカで豪華なこと、当世風でしゃれていることから、流行のスタイルで気取って遊ぶ様子を表し、江戸言葉としてさかんに使われるようになります。黄表紙のタイトルにも「金々先生」が登場しますが、「金々」という言葉が江戸の遊里などで使われ、流行の言い回しになります。

千葉氏の妙見信仰がここにも出てきます。「妙見大菩薩は軍陣に臨んでは、破軍星なるをもって、君の御守りのためにとぞ聞こえし」とあり、妙見大菩薩は軍陣に臨むと君主を守るとされています。

1巻の4は真ん中辺りに線を引いて、場面を2つに分けています。右が妙見大菩薩へ参詣する千葉胤政と末廣姫、左は千田親正が2人をねたみ、家来の轟軍蔵を呼んで頼朝と千葉氏

一党を滅ぼす相談をする場面です。ここでは「頼朝より預かりし二品の宝を盗んで」というところで、「二品の宝」、つまり「茶入れ」と「花生け」と頼朝の位階「二品（にはほん）」が掛詞になっています。また千葉氏の妙見信仰について「胤政、妙見大菩薩信仰ゆえ日々参詣しけるに、上総介広常の息女末廣姫も参詣しけるに、互いに今を盛りの若木の花、あいぼれの身にとぞなりにける」とあります。妙見尊というのは人間の運命や方位の吉凶などを左右する神と言われ、千葉胤政と末廣姫の運命を結ぶ、いわばキューピットのような役割を果たしていると思われまます。

1巻の5は轟軍蔵が千葉胤政の数寄屋へ忍び入り、頼朝公から預かった「茶入れ」と「花生け」を盗む場面です。ここでは「山のとんび、からすかつつけてんとみおるであらふぞ」という当時流行の言い回しが登場します。

1巻の6は千葉常胤が「茶入れ」と「花生け」を紛失した嫡子の胤政を勘当する場面です。色にかまけて胤政が「茶入れ」と「花生け」を盗まれたので、常胤の怒りは頂点に達します。ここでも流行の言い回しとして「金々」が登場しています。

2巻の1では笹屋仁兵衛のもとで盗まれた「茶入れ」と「花生け」の詮索を相談し、折平が検見川にそば屋を出すことになります。検見川は花見川にちなんで、「華見川」と呼ばれた時代もあるという伝承が残っています。源頼朝が鎌倉を目指す途中、頼朝と千葉常胤らが検見川と幕張の間にある橋から水面を眺めると、桜の花びらが漂う筆舌に尽くしがたい風景が広がります。それを見て東胤頼が「行く水の色もあやなる花見川 桜波よる岸の夕風」という歌を詠んで頼朝に献上したのが、花見川の名の起こりと伝わっています。胤頼は千葉常胤の六男に当たり、美濃に所領を与えられて、その後東氏は胤頼の子孫が古今伝授を行なったので、古今伝授の家柄となります。

2巻の2では、右は折平が検見川にそば屋を出して千田判官の家来に酒を振る舞い、判官の謀反の話を聞き出す場面、左は千田判官が国府台で戦の評定をする場面です。「そばをくひに人きたりても、やたらかまわすつんつんとしけるゆへ、ときの人、けんどんそばとは言ひ」では、折平の女房が「つんつん」とすると、「けんどんそば」を掛けています。国府台は、戦国期に安房の里見氏と小田原の北条氏が合戦を交えた場所です。軍記物語『国府台戦記』などに登場し、江戸時代には名所旧跡となっています。

2巻の3では、右は折平がそばの代金に掛け値をすると、千田の軍兵はそば代の代わりに連判帳を預ける場面、左は折平が千葉幽トと名を改めた胤政の下に連判帳を届ける場面です。連判というのとは目的を同じくするものが結束を固めるために、名前を書き連ねることです。江戸時代には百姓一揆などの時に一味団結するため、「傘連判状（からかされんぱんじょう）」などが作られます。千田の軍兵が名前を連ねたものが連判帳と言えます。ここでも掛詞が登場します。「夜ふけてそばを六十四文とはなはだたかくうりけるゆへ、今にいたつてよるうそばをよたかそばとは申すなり」で、夜更けにそばを高く売ると、「夜鷹そば」を掛けています。

2巻の4では、胤政が生け花の大会を催すと、「茶入れ」と「花生け」を持って轟軍蔵が胤政のもとに現われ、胤政に見破られる場面です。

2巻の5は、右が千葉胤政と折平が千田判官の謀反を幕府の執権北条時政と源頼朝に注

進をする場面、左が千田判官は非常に強敵なので千葉氏が妙見大菩薩に戦勝を祈る場面です。ここでも「二品の宝」と「千田の謀反」を掛けています。千葉氏の妙見信仰について「神力を借りて打ち平げんと日ころねんずるところのみやう見大ぼさつの尊ぜんにいたり、父子かうべをかたむけてかんたんをくだきいのりける。きみやうていらい、きみやうていらい」とあります。「帰命頂礼」は、地に頭を付けて礼拝し、深く帰依の情を表すことです。

2巻の6は、兵法の「色を好む者には色をもって欺く」に従い、末廣姫とおさのが旅籠屋の女になる場面です。千田の判官は船橋にとどまりますが、船橋は江戸時代に飯盛り女と呼ばれる遊女が置かれた場所です。成田詣が盛んになると、参詣を終えた人々は船橋の遊女宿で精進落しをしたので、船橋宿が非常に栄えます。

3巻の1でも兵法が登場します。「先んずれば人を制す」に従い、千葉介は早速出立をしますが、千田判官は船橋宿にとどまり、これが2人の運命を分けることとなります。

3巻の2は千田の軍兵を盛りつぶすために、末廣姫とおさのが飯盛り女になり、千田の軍兵が食い過ぎて苦しがる場面です。「おやわんにねぢつけ、ねぢつけ、もりけるゆへにはたごやのとめ女をめしもりという」では「ねじ付け盛る」と「飯盛り」を掛けています。また流行の言い回しとして、大河ドラマのタイトルにもなっている「べらぼう」が登場します。

「べらぼう」は、本来は人をののしる言葉ですが、転じて、程度が桁外れなこと、常識では考えられないばかげたことという新たな意味が生まれ、江戸方言として使われるようになります。本来の語源は穀物をつぶす「へらぼう」ですが、「穀つぶし」つまり働けるのに働かずに遊び暮らし、食べることだけは一人前という人をののしる言葉と言われます。

3巻の3では、笹屋仁兵衛の謀りごとで、「千田の軍兵」は大食大酒で寝入り、「千葉の軍兵」が押し寄せても役に立たない、仁兵衛が駆けつけてこしょうを振りかけると眼も開けられず、「千田の軍兵」が敗軍となる場面です。「これでおうちなさるとほんのこしやうりじや」で「こしょう」と「ごしょうり」を掛けています。

3巻の4は、寒川合戦に妙見大菩薩が示現し、胤政の勝利を導く場面です。「中世の結城浜合戦を題材とした寒川合戦」というキーワードを設けましたので、原文読み、解説を加えます。

「さるほどに千ばの胤政、千田のはんぐわん、下総の国さん川という所にて合せんにおよびけるが、千田のはんぐわんはもとよりきこゆいうてきにて、千ばのたね政とつるにうちなされ、そのうへやだねをいつくしてすでにあやうくなりしところにふしぎや北斗星ひかりをはなして、たね政が三日月の紋のはたのうへにとびくだり玉ふとみへしより、おやつかない、金玉かとおもつたら、なかからわつはしのやうな者があらわれた、とんとふきやというしかけた。びんづらゆいたるどうしのすがたにて妙見大ぼさつあらわれ玉い、てきのいすてたる矢をひろいたね政にあたへ玉ふ。胤政はその矢を以てちたのはんぐわんをいふせければ、すかさず折平はしりかかり、ついにはんぐわんをいけどりける。」ここでは妙見が現れる場面が描かれています。

また、千葉氏の妙見信仰について、「このときまでは千ばの紋所三日月をつけけるが、みやうけん大ぼさつ北斗星のかたちにてはたのうへにあらわれ玉ひしより、それよりちば一とうの紋所をば月にほしにあらためける」と、千葉氏の紋所が月星になったいわれが述べら

れています。

3巻の5は源頼朝が千葉氏に恩賞を与え、胤政に茶の湯を所望する場面です。ここでは「千葉殿のお茶の水」「寒川の古戦場」「行徳の笹屋うどん」「船橋の駅女」「千葉氏の代々の墓」が「今にあるなり」としており、これらが既に江戸時代の名所旧跡であったということが窺えます。

「千葉殿のお茶の水」については、千葉常胤が亥鼻城のふもとに湧く水でお茶をたてて、源頼朝に献上したという伝承が残されています。スライドでは常胤が頼朝にお茶を献上している場面が描かれています。これは現在のお茶の水ですが、今は湧き水も涸れて碑が建っています。

大日寺にある五輪塔が千葉氏の墓と思われませんが、大日寺は戦前までは千葉神社の隣にありました。現在は轟町に移転しています。

3巻の6が最後で、千葉氏と市川海老蔵の妙見大菩薩信仰ということになります。ここでは「千葉氏の妙見信仰と市川海老蔵の妙見信仰で中世と近世を結ぶ」というキーワードを設定しましたので、原文を読んでおきます。

「千葉の一統、この尊像を信仰して武運をひらきたる事、この双紙に作せるが如し。近くは二代目市川海老蔵、この妙見大菩薩を信心する事多年にして、ついに役者のおや玉となりたり。其のほか、異けんはあけてかそへかたし、くわしきこと下総国、千葉妙見寺のえん起にしるしぬるあいだ、信心のともがらいただいて御らんあるべし。」二代目市川海老蔵は、四世の市川團十郎に当たり、明和7年(1770)に海老蔵と改名しています。また「下総国千葉妙見寺の縁起」とありますが、黄表紙の撰者、鈴木吉路はこの縁起を題材の参考にしていると思われます。妙見寺翻刻の版本が、近世には広く一般向けに流布しています。

『月星千葉功』を一通り読み終えましたので、最後に「中世と近世を結ぶキーワード」として、「1巻の2、源頼朝と笹屋うどん」「3巻の4、結城浜合戦と寒川合戦」「3巻の6、千葉氏と市川海老蔵の妙見信仰」について見ていきたいと思えます。

1巻の2は、中世の源頼朝と近世に繁盛した行徳の笹屋うどんを結んでいます。スライドに「笹屋うどん」の看板が見えますが、これは大田南畝の揮毫で安政年間(1855~60)に作られたという「笹屋のケヤキ大看板」です。物語では源頼朝が安房に逃れる途中、行徳に立ち寄るという設定です。スライドの中でここにいるのが源頼朝と言われ、主従7騎が小舟に乗って安房に逃れる様子が描かれています。

「笹屋屏風」には、仁兵衛が頼朝にうどんを振る舞って源氏の家紋「笹」を与えられ、笹屋と改めたという伝承が記されています。行徳は江戸と下総を結ぶ行徳船の船着き場で、江戸時代に成田詣や三社詣が盛んになると経由地として栄えます。笹屋うどんは江戸から明治にかけて広く知られた名物で、旅人は船を待つ間に笹屋で一休みしました。川柳には「さあ船が出ますとうどん屋へ知らせ」とあります。十返舎一九の『南総紀行旅眼石』の中には笹屋うどんについて「このところはうどんの名所にて、往来の人足を留め、鯉鮓、蕎麦切りたうべんことを、せちに乞ひ」とあります。一九も笹屋でうどんを食したのではないかと思われれます。

「笹屋屏風」は六曲屏風で詞書と絵からなり、『月星千葉功』と類似点が多いことから同

時代に制作されたのではないかと思います。頼朝に妙見の尊像を差し上げている場面がスライド中央に描かれています。

3巻の4では、「寒川合戦は中世の結城浜合戦に題材を求める」というキーワードにしました。『源平闘諍録』や「千葉妙見大縁起絵巻」(若葉区大宮町栄福寺蔵・非公開)は、妙見説話が主題です。『将門の妙見説話』は、承平5年(935)に染谷川の合戦で妙見が示現する逸話です。『成胤の妙見説話』は治承4年(1180)の結城浜合戦で、千葉常胤の孫、成胤と千田判官が戦う場面に妙見が示現する逸話です。

『将門の妙見説話』では、染谷川の合戦で妙見が示現しています。虚空から現れる妙見、川の瀬踏みで浅瀬を将門に知らせる妙見、落ちた矢を拾い将門に与える妙見が描かれています。『成胤の妙見説話』は『将門の妙見説話』と非常によく似ており、同じように妙見が示現しています。

このスライドは「笹屋屏風」に描かれた結城浜合戦です。江戸時代の物語では成胤を常胤の嫡子胤政に置き換え、寒川合戦で妙見が示現して胤政を助ける説話になっています。頼朝の覚えめでたい胤政、末廣姫と相思相愛の胤政に対する千田判官のねたみが、寒川合戦の原因という落ちで結ばれています。

3巻の6は「千葉氏と市川海老蔵の妙見信仰が中世と近世を結ぶ」がキーワードです。妙見信仰は遊牧民の北極星に対する信仰と、道教や仏教が集合したものとされます。渡来人などが日本に伝えると、まず朝廷に受け入れられます。武家政権が成立すると妙見菩薩を弓矢の神とする武神的な信仰が広まり、武士団に受け入れられます。戦国期には現世利益や来世の幸福を求める信仰として、広く一般に受け入れられる大衆信仰となります。

「千葉妙見大縁起絵巻」には、「妙見大菩薩を信心奉れば七難を払い、七福を生ず、病気、軍死を除き、名を揚げ、仏果円満の覚位疑い無し」という表現が見られます。千葉氏は北極星と北斗七星を神格化した妙見尊を守り本尊として篤く信仰し、一族の団結を図ります。そして、妙見大菩薩の尊像を妙見宮に祀ります。このスライドが妙見大菩薩の尊像と、妙見尊を祀っている現在の千葉神社です。

妙見社の祭礼は千葉常重が亥鼻に居を構えた翌年に始まり、大治2年(1127)から現在の妙見大祭まで途切れることなく続いていると言われます。昭和20年(1945)8月15日の終戦の翌日にも手作りの神輿を担ぎ、妙見大祭が行われたという禰宜(ねぎ)さんのお話を聞いたことがあります。7月7日の七夕空襲で、千葉神社の神輿は焼けてしまったのです。

江戸時代の妙見社祭礼は、「下総国千葉郷妙見寺大縁起絵巻」(相馬妙見歡喜寺蔵・非公開)に描かれており、妙見社の祭礼の様子がよく分かります。先頭には千葉の町衆が曳く千葉舟、次に妙見社の神輿、最後に寒川の町衆が曳く結城舟が続きます。この行列が千葉の郷中を練り歩き、舟の上では舞楽が催されています。周辺には大勢の人々が集まり、千葉の街で繰り広げられる祭礼の様子を見物しています。上部が黒い飾り幕を廻らせているのは千葉舟、上部が赤い飾り幕は結城舟です。寒川の結城舟の飾り幕は現存しており、嘉永3年(1850)に作られたという由緒書があります。中央に描かれている月星紋と九曜紋は、千葉氏の家紋です。この大船の飾り幕は、千葉市の指定文化財に指定されています。妙見信仰が江戸時代に一般大衆に広まった背景には、妙見大祭や妙見寺の縁起なども大きな役割を果たしていた

と思われま

次に市川海老蔵の妙見信仰についてですが、市川家は歌舞伎の大名跡で屋号は成田屋、成田不動が市川家の十八番です。八世團十郎は千葉妙見社の居開帳で一千疋を奉納しています。居開帳では普段見せない仏像を一定の期間公開して、特別に拝観することができます。一千疋は2.5両で、江戸時代は1両で1石のお米が買えました。1石は1年間に1人が食べる米の量と言われ、2年半分の米が買える金額になります。現在の貨幣価値に換算するのは難しいのですが、1両はおよそ10万円前後とされます。

3巻の6では、「一世一代の舞台をふみおさめ、この初はるをむかへぬることひと入此大ぼさつの御かごなり」と結び、市川海老蔵の妙見信仰が描かれています。スライドは十三代目市川團十郎白猿が、襲名披露の記念講演を行った時のものです。

最後に『月星千葉功』の特色をまとめておきます。『月星千葉功』は『源平闘諍録』、「千葉妙見大縁起絵巻」などに登場する中世の逸話を取り上げ、庶民が親しみやすい作品としています。黄表紙の中では、「頼朝の再起と千葉氏」「結城浜合戦」などの題材を中世から近世に置き換えています。武家政権の創始者である源頼朝再起の道のりは、物語性に富んだ波乱万丈のサクセスストーリーで、広く江戸庶民の人気を集めました。

千葉常胤は頼朝の再起を支えた立役者として、この物語の中に登場します。物語は妙見信仰を柱として、「妙見信仰」に始まり「妙見信仰」で終わります。「源頼朝と笹屋うどん」「千葉氏と市川海老蔵の妙見信仰」は、中世と近世を結ぶキーワードです。また、「市川海老蔵」は歌舞伎と黄表紙、千葉と江戸、近世と現代を繋いでいます。

妙見社の祭礼は中世の千葉氏から始まり、江戸時代には庶民の祭りとして広まり、現代では千葉を代表する妙見大祭となっています。来年は千葉開府 900 年ですが、再来年は妙見大祭が 900 回目を迎えます。物語を中世から近世、そして現代へと引き継いだところで、私の話を終わります。次の『源平闘諍録』の中の結城浜合戦ですが、『月星千葉功』との違いにも着目していただければと思います。ご清聴ありがとうございました。

## 講演2 『源平闘諍録』の中の結城浜合戦

司会 講演を再開いたします。第2部の講師、岩橋直樹さんをご紹介します。岩橋さんは、明治大学大学院博士前期課程修了後、明治大学文学部助手、埼玉県立歴史と民俗の博物館などの学芸員として勤務し、現在は千葉市立郷土博物館で調査研究、講座等の普及活動に当たっております。専門は中世史で、特に中世前期、平安後期から鎌倉時代の武士について精力的に研究を進めています。後半は『源平闘諍録』の中の結城浜合戦についてご講演します。それではよろしくお願いたします。

岩橋 ただ今、ご紹介にあずかりました、千葉市立郷土博物館の岩橋と申します。よろしくお願いたします。

前半の『月星千葉功』いかがでしたでしょうか。だいぶエンターテインメントに振り切った内容だったかと思います。後半では、その「元ネタ」という言い方が適切かどうかはわかりませんが、結城浜合戦を扱った、現存する中では最も古い文献、『源平闘諍録』を読みたいと思います。

### 1 『源平闘諍録』とは

まず『源平闘諍録』とは何かというお話です。皆さん、名前をご存じだと思うのですが、『平家物語』の異本、つまりバリエーションの一つとお考えいただければよいかと思えます。所蔵しているのは国立公文書館、皇居のお堀の端にございますが、そこにある1セットのみとなっています。厳密に言うと、さらにそれを写したものがもう1セット、国立公文書館に収蔵されているのですけれども、それしかないという非常に珍しい本であります。

来歴をさかのぼると、江戸時代には幕府の書庫であった紅葉山文庫という所に収められていたもので、その前は徳川将軍家に仕えた医師、曲直瀬道三（まなせどうさん）の蔵書だったとも言われますが、詳しい入手の経緯は、残念ながら今のところよく分かっておりません。見た目はこんな感じです。この画像は国立公文書館のデジタルアーカイブからお借りしたもので、インターネットで見ることができます。パワーポイントではこのサイズでしか見られないのですけれども、デジタルアーカイブでは好きな所を拡大・縮小できますので、ぜひお帰りになってから、ご自宅のパソコンで試してみてくださいと幸いです。

特徴としては、基本的に漢文体ではあるのですが、ところどころに片仮名が書き込んであったりするのが見えますでしょうか。ただの漢文体ではなく真名文（まなぶん）という言い方をするので、漢文の合間に送り仮名や助詞などを置くような独特の文体になっております。

後で本文を読みますが、このままだと非常に読みづらい。しかも通常と異なる読み方をする字もありますので、お配りしたレジュメのうち縦書きの方で、原文ではなく、全文の読み下しと大まかな現代語訳を付けております。時間の関係で省略するところもありますので、こちらもよろしかったら、お帰りいただいてゆっくりお読みいただければと思います。

出来上がった時期についてですが、昔の本には一番最後のところに、専門用語で

「奥書（おくがき）」と言うのですが、この本をいつ、どこで写した、あるいは誰の本を写させてもらったとかいうことを、書き込むことがあります。スライドでお見せしている画像は『源平闘諍録』巻1下にあるものです。修理のために、恐らく薄い和紙を貼って直しているのですが、少し見づらくなっていますけれども、上のところに「建武二二年二月八日」、下に「文和二二年三月廿三日」、これを書くというように書かれていて、2段階で写されたということが分かります。「二二年」というのは、 $2 \times 2 = 4$ なので「四年」という意味です。

現存するものは、実はもう一回、室町時代になってからさらに写されたものだと見られているのですが、確実にこの年代には存在したということを示す記述があるという意味では、『平家物語』の中でもかなり古い時期にできた写本と言われております。具体的にいつできたかということまでは、なかなか難しいところはあるのですが、現状では13世紀の後半ごろから14世紀の前半ごろまでにできたのではないかと考えております。

今お見せしたのは巻1の下と、今回お話する巻5の写真だったのでありますが、現在では巻1の上下・巻5・巻8の上下の5冊しか残っておりません。これ以外の巻は単純に失われてしまったという見方も、もちろんありますが、元から『平家物語』のダイジェスト版として構想されたのではないかと、という説もあります。中身を見ていくと、元の『平家物語』からかなり話を省略して書いているところが多い。そういうところも鑑みても、最初から省略されて全巻そろったものでなかった可能性もあるということも、最近では言われております。

一方で、話を省略して書く割には、東国武士、とりわけ千葉氏に関して、『平家物語』、あるいは同じ時代を描いた、鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』などに見られないようなオリジナルの記事というのをたくさん含んでいるのが、『源平闘諍録』の最大の特徴であります。この特徴は『源平闘諍録』の成立経緯と密接に関わっているのではないかと見られておまして、おそらく千葉氏、あるいは氏神であった千葉妙見宮の関係者、神官であったり別当寺のお坊さんであったり、そういう人たちが制作に関与しているために、こういう作りになっているのではないかと考えております。

## 2 結城浜合戦とその経過

続きまして、先ほどの白井研究員と少し重なるところもあるのですが、結城浜合戦とそこに至る経緯について、簡単に整理をしておきたいと思っております。結城浜合戦が起こったのは治承4年（1180）の9月、日付は諸説ございます。次の『源平闘諍録』を含めた『平家物語』の写本、あるいは『吾妻鏡』を見比べても、頼朝が房総半島に来てからの動向とか、あるいはその日付というのは結構ばらつきがあります。なので、確実にこうだというのはなかなか難しいので、ざっくりと『吾妻鏡』を基準に整理してみるとこんな感じになります。

8月に頼朝は伊豆で挙兵して、最初は伊豆国目代の山木兼隆を首尾よく討ち取るのですが、その後すぐ相模国の石橋山で平家方の大庭景親に完敗を喫し、その後、安房への逃亡を余儀なくされるということになります。9月に入って頼朝は態勢を立て直して、安房の安西氏を味方に付け、その後、上総の上総介広常（かずさのすけひろつね）、下総の千葉常胤に声をかけて、房総半島の平家方と対決をしていくことになります。『源平闘諍録』で

語られるところは、まさにこの頼朝軍の再起の物語ということになるわけですが、ここでも『源平闘諍録』は、『吾妻鏡』などに比べて極端に駆け足になっています。

具体的に言うと、安房での頼朝の動きはまったく描かれません。かわいそうに、安西景益（あんざいかげます）なんて全く無視されています。遅刻のエピソードで有名な上総広常も、上総国府を出発する段階で頼朝軍に合流しています。平家方の中でも安房の長狭常伴（ながさつねとも）という武士とか、下総の目代との戦い。これらは『吾妻鏡』では非常に重要視されていますが、『源平闘諍録』ではまったく触れられていません。

場所については、これも先ほどの白井研究員の話と重なるのですけれど、結城浜は江戸時代の書物では、概ね寒川周辺のことと書かれています。合戦の舞台については「結城野」と書く書物もあって、こちらはもう少し範囲が広く、登戸から蘇我の辺りまで含む解釈のようです。

趣旨説明でもお話があったとおり、結城という地名自体は、行政地名としてはすでに消滅しております。私、実は埼玉の人間なので全く千葉の昔の風景というのは知らないのではありません。昔、結城幼稚園という幼稚園があったりしましたが、今となっては中央区新宿町にあるオフィスビルが、唯一の遺称地と言われています。もし地元の方で、「ここにも「結城」の名前が残っているぞ」という情報があったら、ぜひ博物館のほうに情報提供していただけると大変助かります。

状況などもろもろ鑑みますと、おそらく寒川町・神明町・新宿町辺りの海岸付近の地域が、合戦の舞台だったのだろうと考えられております。常胤たちは頼朝を上総まで迎えに行っているのです、東京湾沿いを北上してくる可能性が高く、またここには結城浦という入江があって湊にもなっていたので、頼朝が舟で北上してきた場合にも備え、千田親正はこの辺を押さえて頼朝軍を迎撃するのが狙いなのだろうと推察をされております。

当時の房総半島の地図を少し見ておくと、親正の拠点のある千田荘は、今の多古町の辺りにありまして、そこから「武射の横路（むさのよこみち）」という、一旦上総国に入るルートを通り、鳥取というところでこの香取道というルート、ここは実は一時期、東海道になっていたルートなのですけれども、この街道を通して北東の方角から千葉の町に進入してくるというルートを取ったのではないかと推定されています。

次は、人物についてです。『月星千葉功』に比べると、かなり人数が多いので主立った人だけ紹介しておきます。千葉氏側での主役は、千葉成胤（ちばなりたね）という人物で、彼は常胤の孫です。『源平闘諍録』の記述によりますと、おばあさんである秩父重弘（ちちぶしげひろ）の娘の葬儀に従事していたため、お父さんやおじいさんが頼朝を迎え出た後も、千葉に残っていたと説明されております。ただこの秩父重弘の娘だというおばあさんは、この2年後、後の鎌倉幕府2代将軍となる源頼家が誕生した時に、千葉氏は一族を挙げてお七夜の儀という儀式を担当するのですけれども、その時にこのおばあさんは、陪膳役（ばいぜんやく）という大役を仰せつかって活躍しておりますので、この時点ではまだご健在だと思います。なぜ『源平闘諍録』は、こういうフィクションを設けたのかというのは難しいのですけれども、千葉氏の妙見伝説の中には、秩父方面からやって来たという話もありますので、あるいはこの妙見の権威を、おばあさんを通じて成胤が継承するというのも、もしかしたら

構想のうちに入っていたのかもしれませんが。成胤は、『源平闘諍録』の中では加曾利冠者（かそりのかじゃ）と名乗っています。有名な加曾利貝塚のあるところで、千葉荘内の地名です。

一方、それと敵対したのが、こちらは先ほど『月星千葉功』にも出てきた千田親正です。彼は千葉氏と相馬御厨（そうまのみくりや）を争ったことで有名な下総守藤原親通（ふじわらのちかみち）の孫ですが、彼の名前、調べると意外といろいろなところに出てきて、同じ合戦の周辺を扱った『吾妻鏡』では、「千田庄判官代（ちだのしょうほうがんだい）親政」。『尊卑分脈（そんぴぶんみやく）』という室町時代ぐらいにまとめられた系図の中では「皇嘉門院判官代（こうかもんいんほうがんだい）、智田判官代親雅」と書かれております。名前の表記は違いますが、読み方はいずれも「ちかまさ」で、同一人物です。

彼の一族は調べてみると、都の貴族の日記などにも時々名前が出てきておりまして、それを見ていくと、もともとはどうも摂関家に仕えていた一族のようです。ただ、後でも『吾妻鏡』の記事で触れるのですけれども、平忠盛と婚姻関係を結んで、いつの頃からか平家に接近していたようです。『吾妻鏡』でも『源平闘諍録』でも、平家と気脈を通じていたということが触れられております。

彼らはもともと都で活動していた一族なのですけれども、千葉氏との抗争などを経て千田荘ですとか、匝瑳北条といった現在の千葉県で言えば比較的北とか東のほうに当たるエリアを制圧して拠点にしていたようです。その過程で、もともとその地に根付いておりました両総平氏、つまり千葉氏から見ると遠い親戚に当たる鴨根氏の子孫たちを、自分の家臣として組織しています。

### 3 『源平闘諍録』の結城浜合戦記事を読む

では、『源平闘諍録』の結城浜合戦の記事を、実際に読んでみたいと思います。お手元の縦書きの方の資料を見ながら、お話を聞いていただければと思います。文体は先ほど申しましたように、元は真名文というものですけれども、読み下しの形に改めてざっくりとした訳を付けております。通常の漢字の読み方と違うところも結構あつたりしますが、先ほど言いましたように、もともと史料に付いているルビ、あるいは送り仮名などから想定される読みなどを、できる限り尊重して振り仮名を振っておりますのでその点はご了承ください。

まず、最初に「右兵衛佐、坂東の勢を催すこと」。「治承4年9月4日。右兵衛佐頼朝、白旗差して、五千余騎の兵を率して上総国より下総国へ発向す。ここに上総権介広常、右兵衛佐の御前にひざまずきて申しけるは、『君はこのほどの戦に疲れさせたまいしうえ、兵どもも進み難くす。新手の随兵をもって、広常先陣をつかまつらんと欲す。』広常に相い随うべき輩には…」となっていて、以下、広常の指揮下にある人の名前が列挙されています。大まかに現代語に訳すと、治承4年9月4日、頼朝が上総から下総に向かいました。広常が「頼朝様、これまでの戦でお疲れでしょうから、われわれが先陣をやらせてもらいます」というふうに宣言する。ここで広常に付いてくる人の顔ぶれは、縦書きの資料の8ページの系図にまとめてあります。これで見えていくと、広常の軍勢というのは、一族のかなり広い範囲をカバーしていたということが分かります。名字の地を見ても、彼は上総をメインの拠点としている割には、実は下総の軍勢も結構組織することができている。この段階では、常胤で

はなく広常のほうこそ、両総平氏をまとめる地位にいたということがわかります。そういう立場にあった広常が「先陣をやらせてもらいますよ」、と言ったわけですが、それが気に入らないのが千葉常胤です。

その後のところを読んでいきます。「千葉介常胤申しけるは、『権介の所望謂れなし。他国は知らず、下総国においては他人の綺（いろい）あるまじ』。「綺」というのは、介入とか妨害とか、そういう意味の言葉です。「他の国は知らないけど、下総国の先陣は他のやつには譲らないよ、私が先陣をやらせてもらおう」と言って、対抗します。常胤が従える人々の名前を見ますと、「新介胤将、次男師常、同じく田辺田四郎胤信、同じく国分五郎胤通、同じく六郎胤頼、同じく孫塚平次常秀、武石次郎胤重、能光の禪師らをはじめとして、300余りの兵を引率して下総国に打ち向かいけり」とあるのですが、軍勢の数も広常が1,000、常胤が300なのでだいぶ開きがある。軍記物の兵の数はあまり当てにならないのですが、顔触れを見ても常胤が部下として従えているのは、みな彼の子どもや孫となっております。この辺もやはり広常と常胤のパワーバランスというのを反映している部分ではないかと言われております。

では続いて次の段。少し長いので、さらに①②③というふうに段落を分けました。「加曾利冠者、千田判官代親正と合戦する事」。ここは親正の出陣までのシーンです。「さる程に、平家の方人千田判官代藤原親正、右兵衛佐の謀叛を聞いて『われ、東国にありながら頼朝を射ずしては言うに甲斐なし。京都の聞こえも恐れあり。かつは身の恥なり』とて、赤旗を差して白馬に乗って、匝瑳の北条の内山館より右兵衛佐の方へ向かわんと欲す。相従う輩…」、このあとは、またここに名前が出てきますが、先ほど申しましたように、親正が従える軍勢は、みな鴨根常房という人の子孫で、上総広常や千葉常胤たちと遠縁の親戚に当たります。

今、スライドに出している写真が内山城跡です。親正の屋敷があったと言われていたところですが、今の匝瑳市にあります。ただ考古学的な遺物や遺構が出ていないわけではないので、本当に屋敷があったかどうかは定かではありません。とはいえ内山という地名は残っているので、この周辺におそらく親正の拠点があったのだろうと言われております。彼は軍勢を率いて武射の横路を越え、白井の馬渡の橋を渡って、千葉の結城へ侵攻するわけです。先ほど申しましたように、ここが千田荘で、ここが武射の横路。ここ（鳥取）で旧東海道に合流してここ（北東の方角）から千葉に侵入するということですね。

今、名前が出てきた白井の馬渡というところなのですが、香取道、古代の東海道が鹿島川をまたぐ渡しであったと推定されています。今出している写真は、現在の鹿島川を渡る旧東海道と想定される場所です。こちらは新しい橋と河道（かどう）でして、奥側に見える橋が架かっているところが旧河道です。

続いて②、今度はいよいよ成胤が出てきます。「時に加曾利冠者成胤、祖母死去の間、同じく孫たりといえども養子たるによって、上総国へ参向すといえども、千葉の館にとどまって葬送の営みありけり。彼の祖母はこれ秩父太郎大夫重弘の中の娘とぞ聞こえし。然る程に、『親正の軍兵、結城の浜に出で来たる由』、人申しければ、成胤これを聞いて急ぎ人を上総へ参らせて、『父祖を相待つべけれども、敵を目の前に見てかけ出さずは、我が身ながら人に非ず。豈、勇士の道たらんや』とて、俄かに七騎を相具し、一千余騎にぞ向いける」おぼ

あさんの葬儀を行っていた成胤、そこに親正が攻めてきたという知らせが入ります。普通に考えれば、お父さんやおじいさんが頼朝と合流して帰ってくるのを待つべきだけれども、「敵が目の前に来ているのに戦わないのは恥だ」と言って、わずか7騎で親正の軍に戦いを挑みます。ただ、この7騎というのは具体的な数というよりはある種の定型表現で、軍記物語では兵の数が少ないことを示すのによく用いられます。千葉氏の場合、妙見の北斗七星の「七」になぞられた聖数として、極端にこの7という数値が強調される傾向もあるので、実数かどうかは分かりません。いずれにせよ、彼は少数で大群の親正軍に突っ込んでいったわけです。「成胤、進み出でて申しけるは、『柏原天皇の後胤、平親王将門には十代の末葉、千葉の小太郎成胤、生年十七歳に罷り成る』とて、四角八方打ち払い、蜘蛛・十文字にかけ破り、はるかなる澳（おき）に馳せ出でたり」。柏原天皇とは桓武天皇のことです。平将門は本来千葉氏の先祖ではないのですが、千葉氏の言い伝えの中では、先祖の平良文を将門の養子としているため、こういう表現になっています。さて、少数ながら親正軍に突っ込んでいった成胤は、八面六臂の戦いを繰り広げるわけですが、「然れども、親正は多勢なり、成胤は無勢なる間、両国の堺河に迫め着けられたり」と、結局追い込まれてしまいます。この堺河というのは、上総と下総の国境の川で、現在の村田川を指します。そこまで追い込まれてしまって、もう駄目かと思われた時に奇跡が起こります。

「然れども僅（かぶろ）なる童あつて、敵が射る矢を中（ちゅう）にて受け取りしかば、成胤および軍兵らにも当たらずして、左右（とこう）に違えて時を移す程に、両国の介の軍兵ども、雲霞の如くに馳せ来たりけり。」今日は、『源平闘諍録』の妙見関係の伝説について、時間の関係もあってあまり踏み込めないのですけれども、この「僅なる童」が、実は妙見の化身だったということが後で明かされるわけです。ただ、後の時代の千葉氏の伝承になると、実は妙見さんが、もっと積極的に戦います。矢を空中でキャッチするだけじゃなくて、キャッチした矢をさらに自分で射ち返したり、矢を使い果たした成胤の軍勢に矢を渡してくれたり、いろいろやってくれますが、この段階だとまだかなり妙見さんの働きはシンプルで、あくまで矢から守ってくれるというだけの話にとどめられております。

このようにして妙見さんが助けてくれている間に、両国の介、つまり頼朝の迎えに出ていた千葉常胤と上総広常の軍勢が帰ってきて、合戦に参加することになります。つまりこの段階だと、妙見さんは、まだ成胤を守ってくればしたものの、親正を倒してはくれない存在にとどめられているというところも、この話が後の時代の話に比べて、古い時代の妙見さんの姿をよくとどめているということが言えるかと思えます。

次に③の結城浜合戦の決着のシーンです。広常軍と常胤軍が合流してくるシーンですね。「上総介、成胤が無勢を見て申しけるは『あれはいかに、軍（いくさ）の門出にはもっとも祝うべきものをや。千葉の小太郎、無勢をもって多勢に向かう条、僻事（ひがごと）なり』と、云いも終（はて）ず、広常早く馬を先を懸けん」とす。」上総介広常が、成胤が少数で闘っているのだから、「あいつは何と無謀なことをやっているのだ、合戦の始まりというのは一番験を担ぐべきところであるにもかかわらず、あえて不利な戦い方をするなんておかしいだろう」と。「僻事」というのは間違っただけとか、おかしいことという意味で、成胤の無謀な戦いぶりを見て急いで突っ込んでいくわけです。

それを聞いた成胤は、「成胤これを見て、『上総介、悪しくも申されつものかな。その上、父祖共に上総へ参り、成胤ばかり残りどどまるにおいては、重代相伝の堀の内、必ず敵に蹴らるべし。わが身討たれて後は、左右（とまれかくまれ）、それを知るべからず。』成胤としては「上総介め、勝手なことを言ってくれる」と、不満だったわけですね。「重代相伝の堀の内」とは、自分の所領の中でも、代々受け継いだ一番中心に当たる部分を指します。具体的には千葉のまちのことなのでしょうね。ここは必ず敵に狙われるだろうと。やはり武士というのは自分のそういう土地を敵に踏み荒らされるのを非常に嫌います。自分が討ち取られた後のことなど知ったことかと、再度とって返します。ここまでは基本的には頼朝を迎えに出た軍勢が戻ってくる、さっきの海沿いの道を北上してくるのと合流するのを最初から狙った上での撤退戦だったわけなのですが、味方の軍勢と合流したことで、成胤がここで馬を返して再度、突撃になるわけです。またその後ろに軍勢の名前が列挙されますが、長いので割愛させていただきます。

「天羽庄司が射ける矢に原の六郎乗馬を射斃（たお）さる。六郎かねて手を負いたれば、馬より下り立ち、太刀を杖につき立たりけり」この原六郎は常直という名で、親正軍の武士ですが、詳しい話は書かれてないですけれども、彼はこの合戦より前から負傷をしていたようで、馬を射倒されてしまい、太刀を杖にして何とか立ち上がった。これを見て、同じく親正軍の原平次常朝、同五郎清常が駆け寄って、何とか彼を逃がそうと清常の馬に乗せようとします。常朝と清常は、常直の兄弟です。しかし、「清常の馬に乗せんとすれども、六郎大事の手を負いければ、魂を消して乗り得ず。」「魂を消す」というのは、意識がはっきりしない状態のことを指します。もともとのけがに加えて、落馬のダメージがかなりひどかったのか、もうろうとしてしまって、仲間がなんとか馬に乗せて逃がそうとしても、それすらかなわない状態になってしまった。そこに敵がだんだん近づいてきます。常直は「われ助かるべしとも覚えぬ。敵已（すで）に近づき候（そうろう）。各（おのおの）此を罷り去りたまえ」と、兄弟たちに自分を置いて逃げるよう伝えます。他にも、同じく親正方の栗飯原権太元常（あいはらごんたもとつね）が、「金咥（きんこう）を射られて討ち取られた」とあります。ただ、残念ながら「金咥」が何なのか。誤字か、はたまた別の意味があるのかは研究者の間でもはっきりしません。こうして、親正の「千田庄次浦の館へ退き」と、撤退していきました。スライドに映しているのが、次浦城跡です。香取郡多古町にあります。ただこの次浦城自体の築城年代は不明です。さっきも申しましたように、平安・鎌倉時代には、山の高い所にはお城や館を造りませんので、おそらく次浦城自体は室町時代以降のお城と考えられています。これは次浦の平野を流れる栗山川。私も一回行ったことがあります。本当に真っ平らな所をゆったり流れている川でして、上るも下るも自由自在なのです。今の多古町の辺りは、台地の間を真っすぐに谷が走っているような地形になっておりまして、そこをゆっくり流れる川が南北と東に流れていて、様々な水域につながっています。なので、ここは実は内陸水運の要衝になっておりまして、おそらく親正もそれに目をつけて、この辺りを拠点にしていたのでしょう。

以上、結城浜合戦についてのお話はここまでとなります。『源平闘諍録』のこの後の展開に簡単に触れておきますと、先ほどの僅なる童が妙見の化身なのだという話が出てきまし

て、頼朝が「妙見様ってどんな神様なの？」と常胤に説明を求め、常胤がそれに答えるという話が展開します。持ち時間的にそこまでお話しするのは難しいため、配布資料では参考として挙げてありますので、割愛をさせていただきます。

#### 4 『源平闘諍録』における妙見説話—『月星千葉功』との違い—

最後に、『源平闘諍録』における妙見説話、『月星千葉功』との違いに触れておきたいと思います。『吾妻鏡』にも触れますが、これも全て全部は読めませんので、参考のところに『吾妻鏡』を読み下し文に改めたものを載せておきました。後ほど、お目通しいただければと思います。

『吾妻鏡』の方では、結城浜合戦というのは、非常に淡白に描写されております。というか、合戦の場所自体『吾妻鏡』は何も書いていません。常胤が下総目代を破った後に、それを狙って親正（『吾妻鏡』は「親政」と表記）が千葉氏を攻撃してくるという形なので、実は攻撃対象も頼朝を狙うのではなく、最初から常胤を狙っているというところも違いがあります。また、先ほど見ましたように『源平闘諍録』の中では、親正は合戦に負けて、そのまま千田荘に逃げ帰っていますが、『吾妻鏡』では親正は成胤に負けた後に捕虜となって、後日常胤が市川にあった下総国府で頼朝の軍勢を迎えた時に、頼朝軍に引き渡されています。『吾妻鏡』との違いの話は掘り下げるといろいろ面白いところありますが、今回はこの辺までということにしておきます。

『源平闘諍録』と『月星千葉功』の違いについて、筋書きが全く違うということは、もうすでにご理解いただいていると思います。『月星千葉功』はやはり、あくまでもパロディー作品、娯楽作品としての側面が強いことから生じた差ですけれども、その道具立て、つまり舞台や人物を借用してきたにもかかわらず、実は両者には決定的な違いが一つあります。

特に注目すべきなのは、主人公の相違です。『月星千葉功』の主人公は、もう皆さんお分かりかと思いますが、常胤の息子の胤政でした。『源平闘諍録』は今見ましたように、孫の成胤が主人公になっています。実は、『源平闘諍録』の構想の中で成胤を主人公に据えたことには、非常に大きな意味があります。『源平闘諍録』は平良文以来の守護神である妙見と、その加護を受ける嫡流として成胤を顕彰する、という狙いがあるわけです。

この成胤と妙見の関係を強調した契機というのは、13世紀の半ばから後半にかけて、実は千葉氏が危機的な状況にあったということが関係しています。千葉成胤は幕府の中でも活躍しますが、その後ずっと、千葉氏の嫡流は短命の当主が続くこととなります。成胤の息子の胤綱は、2つの説がありますが、31歳ないし21歳で、孫の時胤は24歳で、とかなり若くして亡くなってしまいました。そうするとやはり、一族の中では影響力が低下してくるわけです。

その一方で、ちょうど時期を同じくして、成胤の兄弟の常秀の一族が台頭してきます。この常秀という人は、成胤の弟と言われていますが、彼は源平合戦の中で、おじいさんの常胤に従って九州まで遠征をしております。彼はその功績を評価されてということなのでしょうが、建久元年（1190）におじいさんの常胤から功績を譲られた分も加えて、左兵衛尉という朝廷の武官に任命されております。左兵衛尉自体は、都の官職の中ではそんなに高い地位

ではないのですが、東国武士の中では、しかもかなり若くしてこの官職に就けるというのはエリートコースです。頼朝の時代にはまだ解禁されていませんが、うまくいけば国司のトップ、守まで到達できるルートになっています。結果、これは承久の乱の戦功なども込みなのでしょうが、嘉禄元年（1225）には、彼は下総守に任じられております。千葉氏の当主が名乗る「千葉介」称号は、実態としては「下総権介（しもうさのごんのすけ）」という、当時の国を今の県に例えるなら、下総国の副知事代理くらいの位置づけになりますが、下総守は県知事に相当しますので、役職上は千葉氏の当主の上を行くくらいに出世したことになります。

しかも彼は上総介広常が名乗った「上総権介（かずさのごんのすけ）」の称号と、その遺領の多くを手に入れることに成功しました。彼は今の陸沢町にある大柳館（おおやぎのたち）というところに拠点を移しまして、研究者の間では上総千葉氏と呼ばれています。常秀の息子の秀胤も出世しまして、千葉一族の中では歴代唯一、幕府の中枢機関である評定衆（ひょうじょうしゅう）に抜擢されております。しかも、相模国の有力御家人で当時の幕府でもかなりの影響力を持っていた、三浦泰村の妹を奥さんに迎えています。

ただその後、北条氏と三浦氏の対立が激化し、寛元4年（1246）には通称「宮騒動」という政変が起こり、秀胤はそれに巻き込まれて評定衆から外されてしまいました。翌年、宝治合戦で三浦氏が北条氏に滅ぼされると、秀胤も居館の大柳館を攻められて自害に追い込まれました。

上総千葉氏はこうして没落したわけですが、また嫡流に権威が戻ってくるかという点、どうもそうはならなかったようです。市川市の中山法華経寺には、日蓮の經典の裏紙に、千葉氏の家政機関で使われた廃棄文書が残っています。廃棄予定の書類だからこそ、当時の生々しい事情を教えてくれる史料なのですが、それを見ると、この宝治合戦後の当主亀若丸、のちに元服して頼胤と名乗りますが、どうも彼の言うことを聞いてくれない一族が多かったようです。彼は幕府から命じられた負担について、「一族に分担しても言うことを聞いてくれないので無理です」と、負担額の見直しを願い出るくらい追い詰められていたようです。頼胤を補佐していたのが、彼の叔父さんにあたる千田泰胤、まさに親正の千田荘を継承した人ですけれども、彼の補佐を受けながら、頼胤はなんとかこの状況を打開しようとしていました。

それで行き着いた結論が、成胤流の顕彰によって常秀流を相対化することだったようです。成胤と妙見の関係を強調するというのは、その具体的な方法だったのではないかと研究者の中では言われております。成胤と妙見の関係を強調する結城浜合戦の物語は、その後、千葉氏の言い伝えをまとめた『千学集抜粋』とか「妙見大縁起絵巻」といった史料にも継承されています。『千学集』とか「妙見大縁起絵巻」は戦国時代にできたものですが、どうも一族が危機を迎えるたび、結城浜合戦の物語はいろいろなところで強調されていたようです。

具体的に申しますと、鎌倉の末期から南北朝期、下総と肥前、今の佐賀県の小城に、千葉氏の嫡流が分裂してしまうのですが、彼らが対立していたこの時代は、まさに『源平闘諍録』が写された時期と重なってきます。戦国時代の千葉氏は、当主の夭逝や不審死などもあって、

嫡流の交替がたびたびありました。また、本拠地も千葉から本佐倉へ移転しています。そういう一族の危機にあたって、結城浜合戦をはじめとした千葉氏と妙見の物語は何度も再利用されてきたのではないかとみられています。

## 5 まとめにかえて—江戸時代の結城浜合戦伝説の受容—

最後に「まとめにかえて」ということで、江戸時代の千葉氏伝承について少しかお話をし、結城浜合戦の伝説が流布していく過程を考えたいと思います。

先ほど申しましたように、『源平闘諍録』は、ほとんど世の中に出回らなかったと思われます。次いで、先ほど名前が出ました戦国時代頃に作られた『千学集抜粹』という資料は、江戸時代の学者には結構読まれていたようです。千葉市域で読んでいた人がいたかはよく分からないのですが、佐原などの北総エリアは豊かな商人が多かったということもあって、町方の学者さんのレベルが非常に高く、『千学集抜粹』なども自分で写したりして、研究をしていた人たちがいました。

あとは、これも先ほど名前が出た「千葉妙見大縁起絵巻」。これは若葉区にある栄福寺というお寺に伝わっているのですが、結構いろいろなところで写しが存在することがわかっています。たとえば今スライドに出しているものは、福島県相馬市の相馬妙見歓喜寺に伝わる絵巻の、結城浜合戦の場面です。他にも、国立公文書館には絵巻の詞書のみを写したものが残っています。

配布資料には載せていませんが、千葉県文書館には、『下総国千葉妙見尊略縁起』という史料があります。今の市原市にある、名主さんの家に伝わった、木版刷りのごく簡素な版本でして、簡略版の「妙見寺の縁起」になっています。妙見寺は今の千葉神社の前身で、中世の妙見宮の流れを汲んだお寺です。裏表紙のところに天保3年（1833）の妙見寺の御開帳の話が手書きで書かれていますので、これ自体は江戸後期、『月星千葉功』より後の時代のもので、もう少し早い時期に、この手の木版本はかなり民間で享受されていたのではないかと考えられます。このようにして、江戸時代になると妙見寺の縁起の一部として、結城浜合戦の物語がいろいろなところに広がっていくわけです。

ここで思い出されるのが、『月星千葉功』の最後にあった一節です。「其の他、異見（いけん）は勝（あげ）て計（かぞ）え難し。詳しくこと下総国千葉妙見寺の縁起に記しぬる間、信心の輩（かたが）たいて御覧あるべしがてんかし」、つまり、「詳しい話は妙見寺の縁起を見てね」ということです。ここからも、『月星千葉功』の直接の元ネタとしてその作者が参照したのは、妙見寺の、先ほど申しましたような木版刷りの簡素な縁起類ではなかったかと考えられます。

江戸時代は木版の刷り物が、一般庶民も比較的簡単に入手できる時代でした。そうすると千葉氏のさまざまな伝説が地元の史跡などに落とし込まれていくようになります。白幡神社や、亥鼻城、御茶ノ水など、市内には千葉氏の伝承が残る史跡がいくつもあるわけですが、江戸後期になると『江戸名所図会（えどめいしよずえ）』とか、千葉が登場するものでは『成田参詣記』（『成田名所図会』とも）とか、今で言えば観光ガイドのようなものが編さん・出版されるようになることで、史跡に関する言い伝えがたくさんの人々に伝わって

いきます。そうすると今度は、言い伝えが新たなイメージや物語を生み出し、また史跡にまつわる物語として落とし込まれていく、というループが生まれるわけです。千葉氏の伝説が、いろいろなところにさまざまな形で伝わっていった原因の一つは、こうしたところに求められるのではないかと思います。

『源平闘諍録』の結城浜合戦の伝説は、先ほど申しましたように千葉一族の危機という、かなり切迫した状況で作られたという側面があります。一方で『月星千葉功』があそこまでエンターテインメントとして振り切った描き方ができたのは、あるいはすでに千葉氏が地元を去っていた、という背景もあるかもしれません。厳密に言えば、千葉氏の子孫が全くいなくなったわけではないのですが、ただ地元のお殿様として残っているわけではなかった。だからこそ『月星千葉功』のような、良くも悪くも緊張感から解放された、豊かなエンターテインメントとして展開していくことができたのではないのでしょうか。『月星千葉功』は、そういう意味で千葉氏の伝承を江戸時代的な受け止め方をしたものとして評価できるかと思えます。

最後は少し、雑駁な話になってしまいました。ご清聴ありがとうございました。

## 質疑応答

司会 お時間になりましたので、講座を再開したいと思います。会場の皆さまからたくさんご質問を頂きましてありがとうございます。これから総括主任研究員の外山の進行で、本日の講師2人から回答させていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

外山 それでは、お2人の講師の方、よろしくお願いいたします。今、司会から申し上げましたとおり、たくさんのご質問を頂きましてありがとうございます。本当に申し訳ありませんが、限られた時間でもありますので、全てのご質問にお答えできないかもしれません。その際はご容赦いただければと思います。

まず、最初に言い訳めいたことを申し上げるのですが、私も先ほどから「ちぼうじ」というふうに言っておりましたが、これは正しくは「ちばし」です。「ちぼうじ」というのは間違いになります。というのは、千葉は平家の一族なので、氏(うじ)は「平(たいら)」です。ですから氏は平で、名字が千葉ですね。千葉に土着して千葉の地を名乗ったので、名字が千葉になります。しかし、「ちばし」と言うと「千葉シティ」の千葉市と大変紛らわしいので、耳で聞き分けるために「ちぼうじ」という言葉を連発してしまいました。その点はお含みいただければと思います。

それでは最初にお2人の講師から、何か言い残したこととか、補足とかがありましたら、ごく簡単にお願ひしたいと思ひます。それでは白井さん、お願ひします。

白井 市川團十郎は、現在十三世を数える歌舞伎の大名跡ですが、團十郎と成田は非常に深い関わりがあります。初代團十郎は成田山に祈願して跡継ぎを授かり、成田山を篤く信仰します。七代目は華美な衣装などが天保の改革の政策に触れて江戸を追放され、成田でかくまわれています。その後、成田山に絵馬額を奉納して、額堂を寄進します。市川家が現在まで続くのは成田山のお陰と、團十郎襲名時には成田山へ歌舞伎を奉納します。黄表紙の題材と歌舞伎は深い関わりがあり、江戸時代にはメディア同士の相乗効果もあって成田との関係も深くなります。また、行徳も江戸と成田を結ぶ拠点として江戸時代に栄えたので、黄表紙の中に登場したのではないかとこのことを付け加えておきます。以上です。

外山 ありがとうございます。では岩橋さん、お願ひします。

岩橋 すみません、終盤はだいぶ駆け足になってしまったので言い残しだらけなのですが、全部話すと今度は質疑応答の時間を圧迫してしまいますので、ご質問にお答えする中で、適宜言い残したこともお話しできればと思います。

外山 それではたくさんのご質問を頂きましたが、まず白井に対するほうから入りたいと思います。次のようなものがあります。「石橋山で敗れた頼朝が安房へ逃れる途中で行徳へ寄ったことになっています。花見川の由来も時期がおかしい。石橋山の合戦は8月で

す。だから鎌倉に入るのが10月。それから結城浜合戦は9月14日ということで、秋の話なのですね。ところが、紹介された歌の中でも、花見川の歌というのは桜の花の歌です。頼朝たちが千葉に来たのは桜の季節ではないなど史実とは思えないので、フィクションなのだろうが、現代に伝わる伝承もあり、春町の時代、江戸時代後期に既にあったのか。春町、吉路の創作なのか。こういった名所旧跡や伝承はどこから発したと考えられるのでしょうか」という質問が来ています。大変鋭い質問かと思いますが、白井さんいかがでしょうか。

白井 江戸時代には既にあった伝承と思われまます。行徳については今もお話ししましたが、成田詣は江戸時代非常に盛んになります。成田山新勝寺では深川に本尊の秘仏を移して、出開帳を行います。開帳は資金源ともなり、江戸時代に成田山新勝寺は本堂を建て増して非常に発展します。成田と江戸を結ぶ拠点となる行徳では、ご当地グルメとして笹屋うどんが有名になり、十辺舎一九の『南総紀行旅眼石』にも登場します。グルメというのは書物の中に登場すると急に広まりますが、これは現代にも通じる場所があります。

フィクションなのではないかという御質問がありましたが、花見川にまつわる桜の歌はご指摘の通りフィクションだと思います。『房総叢書』に入っている「妙見実録千集記」の中で最初に登場しますが、これは江戸時代の後半で、『月星千葉功』が書かれた時期には既にあったと思います。東氏の祖は千葉常胤の六男で、岐阜の郡上を領地としていました。「古今伝授」の家柄ですが、東胤頼の和歌というのは残っていないので、権威付けをするという意味でも胤頼まで遡る必要があったのかと思われまます。このあたりでよろしいでしょうか。

外山 ありがとうございます。同じ方から、先ほど白井からも少し説明がありましたが、海老蔵の妙見信仰について、「妙見は将門にも由来し、千葉氏と縁があるわけですがけれども、成田屋の、市川家の成田不動は将門を調伏すると言いますか、討伐を願うためにまつられたと言われておりまして、そうすると相反する。つまり千葉氏と成田不動というのは相反する関係にあったのではないか。それなのに團十郎が妙見信仰の話を『月星千葉功』で取り上げたというのは、矛盾はなかったのか」というご質問がありました。

先ほど、白井からいわゆるメディアミックス、メディアの相乗効果を狙ったということと、市川家が成田をいかに信仰したかというようなお話がありましたけれども、私のほうから補足させていただくと、初代の市川團十郎は成田の幡谷（はたや）という所の出身ですね。成田から少し佐原寄りの所です。

この幡谷というところは、千葉常胤の四男の胤信が大須賀氏の祖になるのですけれども、その所領で、大須賀氏の有力な一族に幡谷氏がいます。戦国時代までずっと続いていまして、「幡谷家文書」には今でも千葉氏の文書が残っています。團十郎はその出身ですね。そういうことを考えると、確かに将門と成田不動は敵対する関係にはありましたがけれども、成田屋にしてみればそんなに違和感というものは感じなかった、大須賀氏という千葉常胤の四男を経由していくと、それほど矛盾は感じなかったのではないかというように思う次第です。これは私からの補足になります。

それでは、続きましてのご質問ですが、「『月星千葉功』の読者はどういった人でしょ

うか。また、その発行部数は分かりますか」。いかがでしょうか。

白井 『月星千葉功』の読者はどのような人々か、というご質問ですが、黄表紙の作品は武士がペンネームで書いている場合が多くありますので、武士をはじめとして、ある程度の中流意識を持つ庶民の間で広く流布していたのではないかと思います。

発行部数については、現在のベストセラーと比べるとずっと少ないとは思われます。はっきりとした数字はわかりませんが、現在『月星千葉功』があまり残っていないことから考えると、それほど多くはないと思います。江戸時代には貸本屋が非常に流行っていましたので、本を安い値段で借りてそれを読むという文化が庶民の間に広まりました。自分で本を買うのではなく、貸本を通して庶民の間に広まったのではないかと思います。以上です。

外山 ありがとうございます。それでは続きまして『月星千葉功』では何の注釈もなく、千葉氏の人々などが出てきますが、江戸の人は、本を読むような人の常識として、千葉氏の人やその活躍を常識的に常識として知っていたのでしょうか。こういうご質問です。いかがでしょうか。

白井 黄表紙の最後に、くわしいことは下総国千葉妙見寺の縁起に記してあるので、信心の者は、妙見寺の縁起をご覧なされとあります。妙見寺の縁起という版本は、一般の庶民が見られるような状態にあったのではないかと、また、軍記物なども出回っていたので、そのあたりで見ることができたのではないかなと思われます。

千葉氏は歌舞伎には取り上げられていませんが、佐倉惣五郎の伝記などは歌舞伎で取り上げられています。歌舞伎は江戸庶民の娯楽として非常に人気が高く、歌舞伎と黄表紙のコラボ、相乗効果も庶民の間に広まる上で大きな役割を果たしたのではないかと思います。

外山 ありがとうございます。では続きまして、岩橋さんへの質問に移りたいと思います。こういった「鋭い」といったら失礼かもしれませんが、ドキッとさせられるようなご質問が来ています。「史実として、結城浜合戦はあったのか。『吾妻鏡』より推測すると、戦の場所は成胤が千田荘を急襲して千田荘・多古町のどこかではないのか。もしそうであったとしたら、なぜ『吾妻鏡』には記入されなかったのか」というご質問です。

岩橋 ご質問ありがとうございます。私も質問用紙を頂いて、結構ドキッとしましたのですけれども、本編でも少し触れたように、『吾妻鏡』には、成胤と親正が戦ったことは書いてあるのですが、どこで戦ったのかということには全く触れてないのですね。確かに『吾妻鏡』では親正が逃げられずに捕まっているというところを見ますと、その理由を「本拠地にまで攻め込まれたから」というのは、考えられない話ではありません。

ただ、個人的に私が考えているところを申し上げますと、千葉氏は親正と戦う前に下総目代と戦っています。そして、親正は千葉氏が目代を攻めたことを受けて、千葉氏を標的として攻撃を加えています。『源平闘諍録』と違って、彼の狙いは頼朝ではないのです。そして、

目代というのは、必ずというわけでもないのですけれども、往々にして国府の近くに拠点を構えている場合が多いこと、千葉氏が頼朝を下総国府で出迎えていることなどを考慮すると、『吾妻鏡』の編者は、千葉氏と親正の合戦の舞台を下総国府周辺と捉えているとみることができるのではないかと、私は考えております。

『吾妻鏡』と『源平闘諍録』、どちらの記事が史実として正しいかは、学界でも定説はないように思います。安房から下総国府までの行程は、ごく短期間で到達してしまう『源平闘諍録』よりも、相応に時間をかけて房総半島を押さえていく『吾妻鏡』の方にリアリティを感じます。しかし一方で、千葉氏の子もたちの多くが千葉荘内の地名を名字とし、後年千葉氏の所領になったであろう地名を名乗らない点など、『源平闘諍録』にも妙な生々しさを感じる部分もある。参考文献でも挙げましたが、下総藤原氏と千葉氏の研究を牽引され、この3月にも結城浜合戦についての新稿を上梓された野口実先生も、『吾妻鏡』と『源平闘諍録』、双方を組み合わせて妥当性の高い話を導くという手法で、史実を推論されています。細かいところではまた論証の済んでないところがたくさんありますし、不勉強にして私は把握してない学説もあるかもしれませんが、主流となっている定説は今のところないのではないかなと思います。はっきりしないお答えしかできませんでしたが、一応このご質問に対しては、このような回答とさせていただきます。

外山 続きますして関連した質問ですが「結城浜合戦の時、頼朝はどこにいたのですか。富士川へ向かう前のことですか。広常は参加したのですか」とあります。いかがでしょうか。

岩橋 「結城浜合戦の時、頼朝がどこにいたか」については、明記されているものはありませんが、基本的に安房から上総を経て下総に向かうルートを通ることは変わりません。『源平闘諍録』は上総から先は千葉常胤・上総介広常が先陣を希望したことは書いてあるので、頼朝の本隊はその後方ということになるかと思えます。時系列的には、今回お話しした事件はすべて、富士川合戦よりも前のことになります。

上総介広常の合流については、『吾妻鏡』と『平家物語』の各写本によって言っていることが違うというのは、本編でも少しお話ししたと思いますが、『吾妻鏡』では、広常が頼朝軍に合流するのを、武蔵国に入る手前、隅田川渡河前の所に設定しています。『源平闘諍録』は、前の巻が残っていないものもありますが、頼朝が安房を出て上総に入るところから記事が始まり、その時点で常胤と広常の二人とも、頼朝のもとに参じています。この違いをどう捉えるかはなかなか難しいところですが、『源平闘諍録』記事の省略が甚だしく、かなり乱暴に話をカットしているところもあります。広常のエピソードもカットされた結果、「最初から合流させてしまえ」ということになったのか、それとももっと深い意図があってそういう配置にしたのかというのは難しいところです。

では、『吾妻鏡』の方が信用できるかということ、そうとも断言できません。『吾妻鏡』は該当箇所が残っていませんが、広常はご存じのように、最終的には頼朝の手で殺されてしまいます。手を下したのは、大河ドラマでもありましたように、梶原景時ですが、『吾妻鏡』だと、広常は合流に遅刻した挙げ句、頼朝に怒られて「自分が遅刻してきたにもかかわらず、

大軍を連れてきたことで、頼朝が遅刻を咎めないような情けない人物なら、そのまま打ち取って平家に首を差し出そうと思っていた」というほど、かなり尊大な人物として描かれています。他にも、頼朝が三浦半島へお出かけをした時、頼朝を出迎えた時に馬から下りるように求められても、「公私三代にわたって、そんなことはしたことがない」と言い放ったり、接待役で頑張った武士たちを労うシーンでも、三浦の一族で岡崎義実という人が、頼朝がその日着ていた着物をごほうびでもらうと、「あんなじいさんにあんなきれいな着物を着せて、自分の方が似合うのに」と文句を言ってけんかになるという話があったりとか。『吾妻鏡』は、どうも広常の印象を悪くする、エピソードを挿入することで、読者の広常に対する心象を悪化させていくような方向性を持っているようにも見えます。「大物だけど尊大で嫌な奴」。そういう人物として、広常を描いています。実際に『吾妻鏡』の記事をすべて見ていくと、広常はその後大切な儀式で重要な役目を任されたりしているので、どうも頼朝と広常の関係は良くなったり、悪くなったりを繰り返しているようです。

そういう事情もあって、『吾妻鏡』と『源平闘諍録』、どちらが史実だったという、はっきりした答えというものは出ないのですが、史実がどうだったかを読み解くのと同時に、それぞれの歴史書や物語が、どういう仕掛けを施していて、読者にある人物・ある事件をどう読み取ってほしいのか、というのを捉えながら読んでいくことが大切なのだろうと思います。歴史学で言うところの一次史料、同じ時代の都の貴族の日記などでさえ、遠く離れた東日本の話は不正確なことも出てきますので、さまざまな史料を組み合わせ、妥当な線を探っていくしかないのかなと思います。すみません、またはっきりとしないお話になってしまいました。

外山 ありがとうございます。いま話が出ました、要するに『吾妻鏡』のニュースソースですね、『吾妻鏡』がどういうようにしてできたのかという問題については、藪本勝治氏が『吾妻鏡―鎌倉幕府「正史」の虚実』（中公新書）という大変面白い本を出していますので、ご興味のある方はぜひ読んでいただければと思います。

では、お時間も迫ってまいりましたが、お二方にお聞きしたいのですが「本文にある寒川の古戦場は、江戸時代には知られた名所だったのでしょか。具体的には寒川のどの辺りだったのか分かっているのでしょうか。もし文献等書かれているようでしたら教えてください」というご質問です。それでは、白井さんからお願いします。

白井 寒川古戦場については、黄表紙『月星千葉功』の中にも登場しますので、名所旧跡ということで江戸時代には一般にも広まっていたと思われれます。文献等については岩橋講師にお願いしたいと思います。

岩橋 「合戦の具体的な場所」というのは、少し難しいですね。『源平闘諍録』からは、千葉のまちの南、寒川から村田川あたりまでを南下しながら戦っているということにはなると思います。文献的には、と言っても、江戸時代の文献は、その時代にあった人々の口伝の話の拾ったところも多々あるので、文献と伝承の差は、なかなか線引きがしづらいものが

ありますが、少なくとも、江戸時代の半ばから後半ぐらいに書かれた『絵葉概録』とか、あとは、これはどちらかというと千葉氏の伝承になりますが、『妙見実録千集記』という史料を見ますと、結城から少し北にずれたところにあるのですが、白幡神社には言い伝えとして、「頼朝がここに来た時に源氏の白旗を上げた、それで白旗（白幡）神社と言われるようになった」という話が伝わっていることが書かれています。江戸時代の人々はもう少し範囲を広げて、漠然と古戦場をイメージしていたのかもしれませんが。

この白幡神社の話の原型、実は配布資料に参考として載せた『源平闘諍録』の一番最後のところに出てきます。「四、頼朝大勢を聳（なび）かせ、富士河の軍（いくさ）に向かう事」というところ。「然る程に、同じき五日、右兵衛佐七千余騎の兵を帯して、結城の浜より八幡の社頭に馳せ入り、下馬有って、願書を奉りにけり」とあります。この「八幡」は、白幡神社のこととも、妙見寺内に祀られていた八幡社のこととも言われています。結城浜から入るとすると、白幡神社の方がしっくりきそうな気もしますが、いずれにせよ、江戸時代の人々は漠然とした合戦のイメージを、自分たちの住む地域や、所縁（ゆかり）の神社・お寺に引きつけて捉え、寺社の縁起や地元の言い伝えに組み込んでいったようです。そういう動きと版本の出版の相互作用によって、千葉氏の言い伝えは地元で根を下ろしていった、そういうことが言えるのではないかと思います。

外山 ありがとうございます。歴史的な真実というものはもちろん大切ですが、例えば千葉神社、白幡神社、お茶の水など、お近くの千葉氏ゆかりの地をぜひ訪ねていただいて、そういう歴史のロマンというものを味わい、古の人の思いを迫体験していただきたいと思います。お時間を作ってお運びいただければと思います。

あっという間に予定された時間をオーバーしてしまいました。私の不手際でなかなか話が煮詰まりませんでしたけれども、一応これを持ちまして質疑応答の時間を閉じさせていただきます。それでは、どうもありがとうございました。

司会 講師の皆さま、ありがとうございます。それでは、これで講座を終了させていただきます。郷土博物館は11月の上旬にリニューアルオープンいたします。詳しい期日などはホームページや市政だよりで案内いたしますのでご覧になってください。ぜひ御来館いただければと思います。長時間のご清聴、誠にありがとうございました。